

## 教職志望大学生の体育に対する意識に関する研究Ⅱ

— 教育実習直前の学生を対象として —

### Study on the attitude of the students who will acquire elementary school teacher's license to the physical education II

胡 泰 志 ・ 古 谷 嘉一郎

Yasushi EBISU and Kaichiro FURUTANI

This study investigated the attitude of the students who would acquire the elementary school teacher's license to the physical education. A questionnaire survey including free descriptions was conducted on the fifteen students who would attend the practice teaching within 1 or 2 weeks (9 males and 6 females).

The following results were obtained.

1. The students tended to be negative attitude to teach the physical education though they liked it.
2. The students thought that the facilities or apparatus concerning the physical education were needed to improve their skills.
3. The teacher training program had better to be reformed to improve students' skill concerning swimming, gymnastics, and dance.

#### 1. 目的

小学校教員は基本として小学校教育課程の全9教科を担当しなければならない。さらに、教員の資質能力は、養成段階を含め教員の生涯にわたり絶えずその向上が図られるべきものである(教育職員養成審議会, 1999)。そのため、大学の小学校教員養成課程(以下、教員養成課程)においても、小学校教員志望学生の資質能力を最低限必要なレベルまで高めていかなければならない。従って、教員養成課程を擁する大学は小学校教員志望学生に対して全ての教科内容を十分理解させる必要がある。しかし、大学4年間の教育課程の中で全ての教科内容を十分に理解させることは容易ではない。特に、体育や音楽といった実技系の教科では、教科内容の理解のみならず、ある程度の実技能力も要求されるため、これらの教科が得意でない学生の資質能力を小学校教員としてのレベルまで高めていくことは困難でさえある。一般的に、全科を受け持つ小学校

教員は運動や教材に対する知識及び運動技術の指導法に力量不足を感じている者が少なくないと推察されている(加登本・松田・木原・岩田・徳永・林・村井・嘉数, 2010)。また、若い教員ほど「教材・教具の知識・技術」や「運動技能向上の指導法」に困っている傾向がみられる(東川・東原・信本・松田, 1996)。さらに、小学校教諭免許取得希望学生が感じている不安の上位に教科指導のあり方が挙げられている(福田, 2009)。これらのことから、小学校教員志望学生においても体育の授業や指導法に関する不安傾向があると考えられる。

体育は子どもの心身の健全な発育発達及び将来にわたって健康的な生活を送るために欠かせない教科の一つである。一方で、体育は「できる・できない」がはっきりしている教科であり、適切な指導ができなかった場合、体育嫌いの子どもの増やしてしまうこともあり得る。従って、体育を教えることのできる教員を養成していくことは、個々の教員の資質能力の向上のみ

ならず、小学校現場の教育力を維持向上させて行く上でも重要であると考えられる。また、体育が得意な学生ほど体育の授業を教えることに対して自信を持つ傾向があることや、体育の授業を教えたいと思う傾向があることから(胡・古谷, 2011), 積極的に体育の授業に取り組むことのできる教員をより多く育てていくためには、体育が得意な学生の数を増やしていく必要性があると考えられる。一方で、教員養成課程学生の中には体育を苦手とする者も見受けられ、学校の授業以外で運動経験がほとんどない学生もいる。これら体育に対して苦手意識を持つ学生ほど、体育に関して努力をする必要性を感じているものの、積極的に体育の授業をしたいとは思わない傾向があること(胡・古谷, 2011) から、体育が苦手な学生や運動経験が少ない学生に対して、大学4年間の教育課程の中で適切なサポートをしていくことも重要であると考えられる。

小学校教員志望学生を大学4年間の教育課程の中で養成していくと考えた場合、教育実習はその最終段階として捉えることができる。すなわち、それまでの講義や演習、実技等の授業を通じて学修してきた知識や能力を実践する場が教育実習であるといえる。そのため、教育実習直前における学生に関する課題を検討していくことは、教員養成課程の改善及び充実を図る上で重要であると考えられる。そこで本研究では、教育実習を間近に控えた学生の意識調査を実施することにより、教員養成課程学生の体育に関する課題を明らかにすること及び当該学生への支援策のあり方について検討すること目的とする。

## II. 方法

### A. 調査対象者及び調査方法

H大学生15名(男子9名, 女子6名)であった。全員が3年生で、小学校教諭免許, 幼稚園教諭免許及び保育士免許の何れか又は複数の取得を希望していた。なお、調査対象者全員が小学校教育実習を1~2週間

後に控えていた。2011年9月に調査の内容と目的を説明して協力を依頼し、学生は自由意志に基づき無記名で調査に参加した。

### B. 質問紙の内容

#### 1. 小学校教諭職についての意識項目(3項目)

小学校教諭にどの程度なりたいかについて、「1:全くなりたくない」から「5:非常になりたい」までの5件法で尋ねた。また、それぞれの職に就ける自信の程度について、「1:全く自信がない」から「5:非常に自信がある」までの5件法で尋ねた。さらに、最も就きたい職業を1つ回答させた。

#### 2. 体育に関する意識項目(4項目)

体育の授業に対する苦手意識, 体育の授業を教える自信, 体育の授業に対する嗜好の程度, 及び体育の授業実施意欲について5件法で尋ねた(表1)。

#### 3. 体育の内容に関する意識項目(5項目)

小学校指導要領体育編解説(文部科学省, 2009)の教科内容領域を参考に5項目を設定し、それぞれの項目について「自分ができる」及び「子どもに教えることができる」かを「1:全くできない」から「5:ととてもできる」の5件法で尋ねた。具体的な項目は「器械運動(マット運動/鉄棒運動/跳び箱運動)」、「陸上運動(短距離走/リレー/ハードル走/走り幅跳び/走り高跳び)」、「水泳(クロール/平泳ぎなど)」、「ボール運動(バスケットボール/サッカー/ソフトボール/ソフトバレーボールなど)」及び「表現運動(フォークダンス/リズムダンスなど)」であった。

#### 4. 体育の授業に関する自由記述項目(6項目)

体育全般及び体育の教科内容5領域について、調査対象者の実技能力を現在より向上させる、或いは子どもへの指導能力を向上させるために、どのようなサポートが必要だと思うかについて、それぞれ自由記述で尋ねた。

#### 5. 性別及び年齢

調査対象者の性別及び年齢を尋ねた。

表1. 体育に関する意識項目

|                              |                             |
|------------------------------|-----------------------------|
| あなたは体育の授業が得意ですか。             | とても苦手である 1-2-3-4-5 とても得意である |
| あなたは体育の授業が好きですか。             | とても嫌いだ 1-2-3-4-5 とても好きである   |
| あなたは子どもたちに体育の授業を教える自信がありますか。 | 全く自信がない 1-2-3-4-5 非常に自信がある  |
| あなたは子どもたちに体育の授業を教えたいですか。     | 全く教えたくない 1-2-3-4-5 とても教えたい  |

C. 自由記述データの整理手順

体育全般及び体育の教科内容5領域に関する自由記述は、KJ法（川喜田，1967；川喜田，1970）を参考にして分類した。

まず、1記述につき1枚のカード化する作業を行った。カードに記載する文言はオリジナルの自由記述内容に可能な限り忠実なものとした。1記述の中に複数の事項が含まれる場合は記述を分割してカード化した。また、複数の調査対象者の記述から得られたカードの文言が同一であった場合は1枚のカードとした。

まず、体育担当教員が各カードを分類した。次に、小学校体育の授業を受講している大学生11名が各カードの分類にあたった。大学生を5名及び6名の2グループに分け、体育担当教員が分類したカテゴリーに関連するキーワードを参考に、体育全般及び体育の教科内容5領域毎に各カードを分類させた。両グループで一致しなかったカードは、体育担当教員がオリジナルの自由記述の内容を再検討し、前後の文脈を参考にして分類した。

III. 結果

A. 卒業後の進路及び体育の授業に関する意識

分析対象者は15名（男子9名，女子6名）であった（20.7±0.8才）。最も就きたい進路の一つだけ選択させた結果、小学校教諭が最も多く、14名が志望していた。

残りの1名は小学校教諭を志望しているものの、幼稚園教諭にも興味があり、調査時点では志望進路を決めかねている状態であった。

表2に小学校教諭を志望する程度と小学校教諭職に就ける自信との関連を示した。その結果、小学校教諭になりたいと思っているものの、実際に就ける自信がない学生が最も多かった。

表3に体育の授業に対する志向の程度と体育の授業実施意欲との関連を示した。その結果、体育の授業が好きで、体育の授業を教えたいと思っている学生が最も多かった。同時に、体育の授業を教えたくないと思っている学生も少なからずおり、必ずしも体育の授業を実施したいと思っていなかった。

表4-1に体育実技全般に対する自信と子どもに教える自信との関連を示した。その結果、ほぼ全員の学生が体育実技に対する自信はあると回答していたものの、子どもたちに体育を教えることに自信がない学生が多く、体育の授業を実施することにあまり自信を持っていなかった。表4-2に器械運動に対する自信と子どもに器械運動を教える自信との関連を示した。半数以上の学生が器械運動に対して自信を持っておらず、しかも多くの学生が子どもに教える自信も持っていなかった。表4-3に陸上運動に対する自信と子どもに陸上運動を教える自信との関連を示した。多くの学生が陸上運動に対して自信を持っていた。一方で子

表2. 小学校教諭につく自信と進路希望との関連

|             |        | 小学校教諭になる自信 |      |    |
|-------------|--------|------------|------|----|
|             |        | 自信なし       | 自信あり | 合計 |
| 小学校教諭への進路希望 | なりたくない | 1          | 0    | 1  |
|             | なりたい   | 11         | 3    | 14 |
| 合計          |        | 12         | 3    | 15 |

表3. 体育の授業志向と授業実施意欲との関連

|       |    | 体育の授業を教えたい |      |    |
|-------|----|------------|------|----|
|       |    | 教えたくない     | 教えたい | 合計 |
| 体育の授業 | 嫌い | 2          | 0    | 2  |
|       | 好き | 4          | 9    | 13 |
| 合計    |    | 6          | 9    | 15 |

表4-1. 体育全般ができる自信と子どもに教える自信との関連

|          |      | 子どもに教える自信 |      |    |
|----------|------|-----------|------|----|
|          |      | 自信なし      | 自信あり | 合計 |
| 体育ができる自信 | 自信なし | 1         | 1    | 2  |
|          | 自信あり | 9         | 4    | 13 |
| 合計       |      | 10        | 5    | 15 |

表4-2. 器械運動ができる自信と子どもに教える自信との関連

|            |      | 子どもに教える自信 |      |    |
|------------|------|-----------|------|----|
|            |      | 自信なし      | 自信あり | 合計 |
| 器械運動ができる自信 | 自信なし | 8         | 1    | 9  |
|            | 自信あり | 4         | 2    | 6  |
| 合計         |      | 12        | 3    | 15 |

表4-3. 陸上運動ができる自信と子どもに教える自信との関連

|            |      | 子どもに教える自信 |      |    |
|------------|------|-----------|------|----|
|            |      | 自信なし      | 自信あり | 合計 |
| 陸上運動ができる自信 | 自信なし | 3         | 0    | 3  |
|            | 自信あり | 8         | 4    | 12 |
| 合 計        |      | 11        | 4    | 15 |

表4-5. ボール運動ができる自信と子どもに教える自信との関連

|             |      | 子どもに教える自信 |      |    |
|-------------|------|-----------|------|----|
|             |      | 自信なし      | 自信あり | 合計 |
| ボール運動ができる自信 | 自信なし | 5         | 0    | 5  |
|             | 自信あり | 5         | 4    | 9  |
| 合 計         |      | 10        | 4    | 14 |

どもに教える自信を持っている学生は少なく、陸上運動はできるが教える自信がないと思っていた。表4-4に水泳に対する自信と子どもに水泳を教える自信との関連を示した。半数以上の学生が水泳に対して自信を持っておらず、しかも多くの学生が子どもに教える自信も持っていなかった。表4-5にボール運動に対する自信と子どもにボール運動を教える自信との関連を示した。半数以上の学生がボール運動に対して自信を持っていた。一方で子どもに教える自信を持っている学生は少なく、ボール運動はできるが教える自信がないと思っていた。表4-6に表現運動に対する自信と子どもに表現運動を教える自信との関連を示した。ほとんどの学生が表現運動に対して自信を持っておらず、しかもその全員が子どもに教える自信も持っていなかった。その割合は小学校体育の教科内容5領域中最も多く、ほとんどの学生が表現運動をやることも教えることもできないと思っていた。

## B. 体育の授業に関する自由記述

器械運動に関するカードは37枚、陸上運動に関するカードは33枚、水泳に関するカードは30枚、ボール運動に関するカードは31枚、表現運動に関するカードは29枚及び体育全般に関するカードは23枚であった。分類したカテゴリーは「環境的資源（施設や器具）」、「環境的資源（時間）」、「人的資源」、「指導法」、及び「学生の実技能力」の5つであった。

表4-4. 水泳ができる自信と子どもに教える自信との関連

|          |      | 子どもに教える自信 |      |    |
|----------|------|-----------|------|----|
|          |      | 自信なし      | 自信あり | 合計 |
| 水泳ができる自信 | 自信なし | 9         | 0    | 9  |
|          | 自信あり | 4         | 2    | 6  |
| 合 計      |      | 13        | 2    | 15 |

表4-6. 表現運動ができる自信と子どもに教える自信との関連

|            |      | 子どもに教える自信 |      |    |
|------------|------|-----------|------|----|
|            |      | 自信なし      | 自信あり | 合計 |
| 表現運動ができる自信 | 自信なし | 11        | 0    | 11 |
|            | 自信あり | 2         | 1    | 3  |
| 合 計        |      | 13        | 1    | 14 |

表5-1に体育全般に対する必要なサポートに関する記述カードの内容を示した。環境的資源（施設や器具）に関する記述は練習できる場所や道具を必要とする内容であった。環境的資源（時間）に関する記述は、練習時間を必要とする内容に加え、大学で体育を学ぶ時間を求める内容、及び水泳や大学で体育について学ぶ機会がないことへの不安を訴える内容であった。人的資源に関する記述は、個別指導や自主練習の方法を教えてくれる指導者を求める内容であった。指導法に関する記述は指導形態に関する内容が多く、子どもがやる気になる、或いは楽しく授業を受けることを重視している内容であった。また、安全管理についての内容もあった。学生の実技能力に関する記述は練習を重ねることの必要性に関する内容であった。

表5-2に器械運動に対する必要なサポートに関する記述カードの内容を示した。環境的資源（施設や器具）に関する記述は、体育館及びマットや跳び箱等、器械運動を実施するために必要な施設や器具を必要とする内容であった。さらに、それらの施設・器具を自由に使用することを希望する内容であった。環境的資源（時間）に関する記述の多くは練習時間を必要とする内容であった。また、練習時間が十分確保されていないと訴える内容も見られた。人的資源に関する記述は、基礎からの指導や個別指導を行ってくれる指導者を要望する内容であった。指導法に関する記述では指導形態に関する記述が多く、子どもを巻き込んだ指導

表5-1. 体育全般に関する記述カード

|   | 記述内容  |
|---|---|
| A | 練習できる場所が必要  |
|   | 練習できる場所を設ける   |
|   | 道具が揃ってあることが大切                                       |
| B | 練習時間の確保   |
|   | 練習できる時間が必要  |
|   | 練習できる時間を設ける   |
|   | 大学で体育をもっとしたい  |
|   | 練習時間が少ないので、できない人が練習できる時間が必要                         |
|   | 本当に水泳の機会がない   |
| C | これから体育ついて学ぶ機会がないと不安                                 |
|   | 大学での体育の実践的な授業が1年と2年で終わりなのが不安                        |
|   | 指導者による1人1人への十分な個別指導                                 |
|   | 家でどんな練習をしておけばいいのかを指導者に習いたい                          |
| D | 子どもをやる気にさせるきっかけを沢山作ってあげることが大切                       |
|   | 子どもが楽しく、体育の時間をできるようにサポートする                          |
|   | 教員だけでなく、児童が教えることで目標設定につながる                          |
|   | 体育の授業を受けることで、今までしたことのないスポーツの楽しさを伝える                 |
|   | 体育は時期によってできる内容が決まっているので、一つ一つの授業でしっかりポイントを教えなければならない |
|   | 子どもたちへの指導法  |
| E | けがをしないようにする（大けが）                                    |
|   | 安全指導  |
|   | とにかく体を使って練習することが必要                                  |
|   | 沢山やれば上達する   |

A：環境的資源（施設や器具），B：環境的資源（時間），C：人的資源，D：指導法，E：学生の実技能力

表5-2. 器械運動に関する記述カード

|                                    | 記述内容   |
|------------------------------------|--|
| A                                  | マットを十分準備する（1グループ4人程度）                              |
|                                    | 施設や設備（体育館，マット，跳び箱，鉄棒）が必要                           |
|                                    | いつでも練習できる施設  |
|                                    | 設備や施設が自由に使える                                       |
|                                    | 休み時間や空きコマの時間に十分に練習できる場所を確保しておく                     |
| B                                  | 練習時間は3～4時間必要                                       |
|                                    | 練習時間の確保  |
|                                    | 練習時間を多めにとる   |
|                                    | 練習時間や練習回数をより増やす                                    |
|                                    | 運動ができる練習時間がほしい                                     |
| C                                  | 練習時間が全く足りていない                                      |
|                                    | あまり練習できない  |
|                                    | もう1度基礎から教えてくれる先生がほしい                               |
|                                    | 指導者のアドバイス（個人練習の時の練習法など）がほしい                        |
|                                    | 必要に応じて指導者のアドバイスがもらえる                               |
| D                                  | 器械運動が得意な先生と苦手な先生両方の指導を受ける                          |
|                                    | 能力別にグループ分けをして、練習時間を多くとる                            |
|                                    | グループに一人二人器械運動の得意な子を入れ、その子を中心に指導していく                |
|                                    | 上手に出来る子どもと出来ない子が均等になるようにグループを分け、子ども同士で助言し合える環境をつくる |
|                                    | 友達同士でフォームなどをチェックしたり、アドバイスし合ったりする                   |
|                                    | 教員だけでなくで指導するのではなく、上手にできる子にも指導させる                   |
|                                    | 感覚をつかむことが必要なため、マンツーマンで指導する                         |
|                                    | お手本を見せること  |
|                                    | ポイントを教えること   |
|                                    | ポイントを身振り手ぶりを使って具体的に示していく                           |
|                                    | 指導のコツを教えてもらう                                       |
|                                    | 子どもたちへの指導法   |
|                                    | 苦手な子どもへの教え方  |
| 指導者がしっかりとした知識と技術を持ち、大事なポイントを押さえておく |  |
| 実際子どもに行っている指導を体験する                 |  |
| ある程度学んだ上で実践的にやってみる（指導案を書いて毎時間授業する） |  |
| E                                  | 安全指導   |
|                                    | 子ども1人1人をよく見ることが出来る環境をととのえる                         |
|                                    | 器具の有効な活用法  |
|                                    | 器械の扱い方   |
|                                    | ルールや基本を学ぶ  |
|                                    | 急にやると難しい   |

A：環境的資源（施設や器具），B：環境的資源（時間），C：人的資源，D：指導法，E：学生の実技能力

形態に関する内容が多く見られた。また、コツやポイント、苦手な子どもへの教え方についての記述もあり、技術的側面を重視している内容も多く見られた。さらに、器具の使用法や安全管理についての記述も見られた。学生の実技能力に関する記述は、「急に（器械運動を）やると難しい」という記述や、器械運動の基礎を理解していないことが推察される内容が見られ、器械運動があまり得意でないことを自覚していることを伺わせる内容であった。

表5-3に陸上運動に対する必要なサポートに関する記述カードの内容を示した。環境的資源（施設や器具）に関する記述は、グラウンドや砂場といった屋外の施設及び器具を希望する内容であった。環境的資源（時間）に関する記述の多くは練習時間に関する内容であった。また練習時間が十分ではないことや、ハードル走、走り幅跳び、及び走り高跳びといった、グラウンドで行う種目を十分やっていないことに対する言及も見られた。人的資源に関する記述は指導者による指

導を希望する内容で、特に技術的な面の指導を希望していた。指導法についての記述の多くは、コツやポイントといった技術的要素が多く、他の領域と比べて具体的な内容が多かった。また、指導形態に関する記述も多く、その中で楽しさや興味の持たせ方などに触れていた。同時に、指導法について学ぶ機会が十分でないと訴える内容も見られた。学生の実技能力に関する記述は練習を重ねる必要性に関する内容であった。

表5-4に水泳に対する必要なサポートに関する記述カードの内容を示した。環境的資源（施設や器具）に関する記述は全てプールを必要とする内容であった。環境的資源（時間）に関する記述のほとんどが練習時間を必要とする内容であった。また、水泳をする機会自体が十分でないと訴える内容も見られた。人的資源に関する記述は指導者による指導を必要とする内容で、基礎からの指導や個別指導を行ってくれる指導者を要望する内容であった。また、指導者の数にも言及していた。指導法に関する記述については、指導形

表5-3. 陸上運動に関する記述カード

|                                | 記述内容   |
|--------------------------------|--|
| A                              | ハードルがほしい                                     |
|                                | ハードル走の練習のために、仮ハードルのような小さいとべるものや大きめのフラフープがほしい |
|                                | 砂場やグラウンド、タータン（合成ゴムの走路）、砂                     |
|                                | 大きなグラウンドがほしい                                 |
|                                | 場所を確保  |
| B                              | グラウンドも走る環境が整っていないければ記録も伸びないし、正しいフォームも身につけれない |
|                                | 練習時間（8～10時間程度）                               |
|                                | 練習時間がほしい                                     |
|                                | 学ぶ時間が少ない                                     |
|                                | 練習する機会が少ない                                   |
| C                              | 大学の授業でハードル走、幅跳び、高跳びに関しては全く触れていない             |
|                                | 指導者に自分がダメなことを教えてもらう                          |
|                                | 指導者に自分がダメなことを指摘してもらうことが必要                    |
|                                | 指導者にコツを教えてもらう                                |
|                                | タイムを計るなどして向上心を持たせる                           |
| D                              | 走ることに興味を持たせる                                 |
|                                | 早く走るコツを少しずつ実践的に行う                            |
|                                | 高跳びでは棒が怖い児童のためにゴムを使う                         |
|                                | 子どもにコツを教えて、体の使い方を身体にしみ込ませる練習が必要              |
|                                | ハードル走のハードルの越え方を意識させる                         |
|                                | 短距離走のスタートからの体の起こし方を意識させる                     |
|                                | 脚の回転を意識させて指導する                               |
|                                | 踏み込む時の力の使い方を教える                              |
|                                | 足の使い方を正しくすればすぐに結果として表れるので、そこを意識させる           |
|                                | 各競技の押さえるべきポイントを知る                            |
|                                | 理論と指導法（フォーム等）                                |
|                                | 子どもたちに教える時に気をつけることを知る                        |
| 子どもたちが技術を確保するためにどのような指導が必要かを知る |  |
| 指導について学ぶ機会があまりない               |  |
| E                              | 練習する   |
|                                | 練習を重ねる                                       |
|                                | 練習は必ず必要だと思う                                  |
|                                | コツを教えるために技術を磨きたい                             |

A：環境的資源（施設や器具）、B：環境的資源（時間）、C：人的資源、D：指導法、E：学生の実技能力

態についての内容及び技術的要素についての内容が多く見られた。指導形態に関する記述は水に対する苦手意識の克服に主眼を置いた内容であった。技術的要素についての記述はやや漠然とした内容であった。また、安全管理に関する記述も見られた。学生の実技能力に関する記述はなかった。

表5-5にボール運動に対する必要なサポートに関する記述カードの内容を示した。環境的資源（施設や器具）に関する記述は、各種目用の施設と器具を希望する内容であり、特にボールを必要としていた。環境的資源（時間）に関する記述のほとんどが練習時間を必要とする内容であった。また、空き時間を利用することによって練習時間を確保しようとする記述も見られた。人的資源に関する記述は指導者を希望する内容であった。指導法に関する記述は、授業の中にゲームを取り入れた内容が多く見られ、ゲームをする楽しさに主眼を置いていた。また、ボール運動も種目毎にルールが異なるため、ゲームを多く取り入れることによって各種目のルールを理解させようとする意図もあるものと考えられる。但し、各種目についての指導法には言及しておらず、漠然とした理解であると考えらえ

られる。学生の実技能力に関する記述は練習の必要性についての内容であった。

表5-6に表現運動に対する必要なサポートに関する記述カードの内容を示した。環境的資源（施設や器具）に関する記述は、場所と教材については記述があるものの、具体的なものではなかった。環境的資源（時間）に関する記述は練習時間を必要とする内容が多く見られた。また、大学の授業で表現運動を取り入れることを希望する内容や、表現運動をやったことがないという内容も見られた。人的資源に関する記述は全て指導者による指導を希望する内容であった。また、その中には基礎的な内容の指導を希望する記述も見られた。指導法に関する記述については、指導形態についての内容及び技術的要素についての内容が多く見られた。指導形態についての記述は楽しさに主眼を置いた内容及び恥ずかしさの克服についての内容であった。技術的要素についての記述はやや漠然とした内容であった。学生の実技能力に関する記述は、基礎的な練習をする必要性及び練習を重ねる必要性についての内容であった。

表5-4. 水泳に関する記述カード

|                       | 記述内容                                       |
|-----------------------|--|
| A                     | 25M以上のプール                                  |
|                       | 足のつくプール                                    |
|                       | ある適度自由に使える施設                               |
|                       | 水に慣れるために何度も通える身近なプールが必要                    |
|                       | 大学にプールが欲しい（できれば室内プール）施設                    |
| B                     | 練習時間（10～12時間程度）                            |
|                       | 練習時間                                       |
|                       | 練習時間の確保                                    |
|                       | 練習時間を増やす                                   |
|                       | 練習の機会がない                                   |
| C                     | 水に入る機会を増やしていく                              |
|                       | 水泳は限られた期間でしか学習できないので習いに行っている子とそうでない子の差が激しい |
|                       | 指導者が基礎から教えてくれること                           |
|                       | 授業外で苦手な子に教える等の配慮が必要                        |
|                       | 水泳が得意な先生が必要                                |
| D                     | 適切な指導を行える指導者                               |
|                       | 指導者は多い方がよい                                 |
|                       | 水が怖いものでないことを教える                            |
|                       | 水に対する苦手意識を取り除き、水に親しませることから始める              |
|                       | 段階的な指導法（例：水に親しむ⇒バタ足⇒息継ぎ）                   |
|                       | フォームを友達同士で確認し合う                            |
|                       | 水に慣れさせる                                    |
|                       | 息つぎの練習                                     |
|                       | ビート版を使ってバタ足の練習をさせる                         |
|                       | 水泳における指導法（呼吸法、腕の動き、脚の動き）                   |
|                       | ポイントを教える                                   |
| 泳ぎ方を教える               |  |
| まず自分が水泳についての知識を増やしていく |  |
| 安全指導                  |  |

A：環境的資源（施設や器具）、B：環境的資源（時間）、C：人的資源、D：指導法

表5-5. ボール運動に関する記述カード

|                              | 記述内容   |
|------------------------------|--|
| A                            | ボールの数を十分用意しておく                                     |
|                              | 施設や設備（体育館、グラウンド、バレーボール、サッカーボール、サッカーゴール、バスケットゴールなど） |
|                              | ボール運動をする広い場所                                       |
| B                            | 十分に練習ができる場所を確保                                     |
|                              | 練習時間（10～12時間程度）                                    |
|                              | 練習時間の確保  |
|                              | 練習時間を増やす   |
| C                            | 練習時間がほしい   |
|                              | とにかく沢山練習する   |
|                              | 空コマにアリーナをとるなどして、練習機会を増やしてほしい                       |
| D                            | ボールの扱いが上手い指導者                                      |
|                              | 折々で先生からの指導・アドバイスがほしい                               |
|                              | 基礎から練習してゲームをする                                     |
|                              | 種目別にルールを教える  |
|                              | ゲームの後にパス、シュートの練習を行う                                |
|                              | ボール自体に触る機会を増やしていくことが必要                             |
|                              | ゲームの楽しさを知るために、まず1度ゲームを試してみる                        |
|                              | パス、シュート、キャッチボールなどの練習を増やしボールに慣れさせる                  |
|                              | ゲームをしている途中でルールが分かるようになる                            |
|                              | ゲームをする上での基本的な動きや作戦を指導すること                          |
|                              | ボールをよく見る   |
|                              | ゲームのポジションごとに役割があることを教える                            |
|                              | パスなど、基本的な動きを十分練習する必要がある                            |
|                              | 子どもに教えるためにルール等を憶えていることが必要                          |
| 子どもがどこにつまづきやすいかのポイントを指導してほしい |  |
| E                            | 練習方法   |
|                              | 子どもたちへの指導法   |
|                              | 現役の先生の授業を見る  |
|                              | 筋トレ  |
|                              | 練習を重ねる   |
|                              | 自分が上手くなるには練習あるのみ                                   |

A：環境的資源（施設や器具）、B：環境的資源（時間）、C：人的資源、D：指導法、E：学生の実技能力

表5-6. 表現運動に関する記述カード

|                             | 記述内容  |
|-----------------------------|---|
| A                           | 具体的な教材  |
|                             | 広い場所  |
| B                           | 練習時間（5～7時間）                                   |
|                             | 練習時間  |
|                             | 練習時間の確保                                       |
|                             | 大学の授業に表現運動を入れて、音楽等を使ってしっかりと練習し、表現することに慣れていくこと |
| C                           | 練習機会が少ない                                      |
|                             | 表現運動をやったことがない                                 |
|                             | 指導者による音楽やリズム等に動きを合わせる練習                       |
|                             | 指導者による基礎的な動作の指導                               |
|                             | 指導者のサポート                                      |
| D                           | 指導者に教えてもらう                                    |
|                             | 強制的ではなく自らが楽しくできるようにする                         |
|                             | 自由に踊らせて、表現することの楽しさを味あわせる                      |
|                             | 音楽に合わせて体を動かす楽しさを伝えること                         |
|                             | 恥ずかしさが大きいので踊りやすい環境をつくる                        |
|                             | 音楽に合わせて踊れるようにリズム感を身につけさせる                     |
|                             | 子ども達は恥ずかしがって上手くできない事もあるので、指導者の示範が重要           |
|                             | 盛り上げ役がいると助かる                                  |
|                             | 各パートを一回ずつ丁寧に教える                               |
|                             | 子どもがやりやすいステップなどを教わる                           |
| 指導者が多くのフォークダンスやリズムダンスを知っておく |   |
| E                           | 子どもたちへの指導法                                    |
|                             | リズム感を身につけること                                  |
|                             | 沢山本物を見て感覚をつかむ                                 |
|                             | ステップを覚え、ひたすら練習する                              |
|                             | しっかりと練習し、表現することに慣れていくことで恥ずかしがる気持ちもなくなると思う     |
| 自分で練習する                     |   |
| 知識や回数が増えれば教えることができると思う      |   |

A：環境的資源（施設や器具）、B：環境的資源（時間）、C：人的資源、D：指導法、E：学生の実技能力



#### IV. 考察

本研究の調査対象者のほとんどが小学校教員を目指していたが、実際に小学校教諭職に就く自信がない者が多かった。また、一般的に体育が好きで、体育に対して自信を持っているものの、子どもたちに教える自信がない者が多かった。学校現場では体育が苦手な児童・生徒は一定数存在し、その苦手意識の原因として体育ができないことが挙げられている（玉城，1987；玉城，1988a；玉城，1988b）。本研究の調査対象者が所属するH大学では、入学試験に体育を課していない。そのため、体育に対する苦手意識を解消できないまま入学してきている学生が存在する可能性はあるものの、本研究の結果から、その割合は高いものと考えられる。従って、子どもたちに体育を教える自信がない者が多かった原因は別にあるものと考えられる。

また、各教科内容を子どもたちに教える自信をみた場合、教える自信のない者が多かった。但し、水泳や器械運動といった、技術的要素が大きく、「できる・できない」がはっきりしている領域については体育に対する自信がない者が多い傾向が見られた。また、表現運動は、ほとんどの者が体育に対する自信及び子どもに教える自信がなかった。表現運動は、中学校や高等学校では種目選択科目であって、必ずしも履修する必要はない（文部科学省，2008；文部科学省，2010）ことから、表現運動を体験する機会自体が少ないことが原因であると考えられる。

次に自由記述の内容の分析から、どの領域においても指導法に関する記述内容が最も多かった。一般的に小学校教員は運動技術の指導法に力量不足を感じていた（加登本他，2010）り、若い教員ほど運動技能向上の指導法に困っている（東川他，1996）。これらのことから、本研究の対象者も指導法について関心が高いものと考えられる。また、学生の実技能力に関する記述において、練習を重ねる必要性を感じていることや、指導者による指導を希望していることから、自らの実技能力を向上させる必要性を感じていると考えられる。このことは技術的要素が大きい領域である水泳や器械運動、及び学生自らの体験が少ないと考えられる表現運動で顕著な傾向があった。一般的に、スポーツや運動において、自らの技能を向上させることが指導技術の向上方法の一つである。従って、学生の実技能

力を向上させることによって、指導技術についての自信を深めさせることが肝要である。さらに、指導技術についての自信を深めることができれば、体育の授業を教える意欲向上にもつながっていくと考えられる。

一方で、どの領域においても施設や器具を必要としていると同時に、学生自らが練習する時間を必要としていた。このことから、大学の正課授業のみでは体育の資質能力向上を目指すには不十分であると感じていることが言えよう。特に、本研究の対象者が所属するH大学にはプールがなく、水泳が苦手な学生にとって好ましい状態であるとは言い難い。以上のことから、学生がより多く練習できる環境を整備することに加えて、専門の指導員による指導を受けさせる機会を提供することが、小学校教員志望学生の資質能力向上につながるものと考えられる。特に、水泳や器械運動、表現運動については、正課のカリキュラムにこれらの内容を取り入れ、体系的に指導していく必要があると言えよう。なお、本研究では調査対象者が少なかつたため、統計的手法を用いての分析を行わなかった。そのため、調査対象者を増やした上で詳細な分析を行うことを今後の課題としたい。

#### V. 要約

本研究では小学校教育実習を直前に控えた学生を対象に、体育に関する意識調査を実施することによって、教員養成課程学生の体育に関する認識を明らかにすること及び学生への支援策のあり方について検討すること目的とした。その結果、以下の知見を得た。

- ①体育の授業は好きであるものの、子どもに教える自信がない学生が多かった。
- ②教員志望学生の資質能力の向上のために、体育の練習をしやすい環境を整備する必要性が認められた。
- ③水泳や器械運動、表現運動に関しては体系的な指導を行う必要性が認められた。

#### 引用・参考文献

- 胡 泰志・古谷嘉一郎（2011）. 教職志望大学生の体育に対する意識に関する研究比治山大学現代文化学部紀要, 17, 93-106.
- 福田啓子（2009）. 小学校教育実習における現状と展

- 望 (Ⅲ) - 学生の教職感に関する調査から - 東京家政大学研究紀要, 50(1), 71-77.
- 加登本仁・松田泰定・木原成一郎・岩田昌太郎・徳永隆治・林 俊雄・村井 潤・嘉数健悟 (2010). 体育授業の悩み事に関する調査研究 (その1) - 教職経験に伴う悩み事の差異を中心として - 学校教育実践研究, 16, 85-93.
- 川喜田二郎 (1967). 発想法 中央公論新社
- 川喜田二郎 (1970). 続・発想法 中央公論社
- 教育職員養成審議会 (1999). 養成と採用・研修との連携の円滑化について 教育職員養成審議会第3次答申.
- 東川安雄・東原芳美・信本昭彦・松田泰定 (1998). 体育指導の力量形成に関する調査研究 - 小学校現職教員を対象として - 学校教育実践研究, 2, 1-10.
- 文部科学省 (2008). 中学校学習指導要領解説 保健体育編 東山書房
- 文部科学省 (2008). 小学校学習指導要領解説 体育編 東洋館出版社
- 文部科学省 (2009). 高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編 東山書房
- 玉城昭子 (1987). 体育学習に関する小学生の意識 - 体育は「どちらかといえば得意～どちらかといえば苦手」意識を持つ二群の比較 - 琉球大学教育学部紀要 第二部, 30, 107-120.
- 玉城昭子 (1988a). 体育学習に関する中学生の意識 - 体育得意～苦手意識を持つ二群の比較 - 琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部, 32, 197-210.
- 玉城昭子 (1988b). 体育学習に関する高校生の意識 - 体育得意～苦手意識を持つ二群の比較 - 琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部, 33, 369-383.

〈キーワード〉

体育, 小学校教諭, 教員養成, 意識調査, 自由記述

胡 泰志 (子ども発達教育学科)

古谷嘉一郎 (社会臨床心理学科)

(2011.12.22 受理)